

中野・新宅屋本『田植歌乃双紙』 —島根県邑智郡石見町田植歌資料 (II)—

田 中 瑩 一

解 説

本書は島根県邑智郡石見町中野（旧中野村）横見原、小笠原威若氏の所蔵本である。同家は屋号を新宅屋と呼ぶ故に本書を「中野・新宅屋本」と呼称することとする。同家には他に『歌乃雙紙』と題する田植歌本もあり、これについては筆者が本誌前号（第一号、一九八五年三月刊）に翻刻紹介した。両書とも「田植草紙」系「第一類」に属する田植本である。

本書の体裁は、縦二十四センチ、横十七センチ、表紙及び裏表紙は半紙二枚を重ねて袋とじにし、本文は半紙袋とじ三十五丁に記されている。その間に落丁、乱丁等は認められない。ただし、第三十丁裏が、「ようさのあらいしげふなれかしな／をうてなりともものゆをやしけふなれかし」（／は改行をあらわす）という「オヤコウタ」で終っている。このあととくともこの歌の「オロシ」一行（以上）の記された第三十六丁があったものと考えられるが、破損の痕跡は見あたらない。各面五乃至六行書き、「オヤウタ」の頭に墨で○

印を、「コウタ」の頭に朱（まれに墨）で△印を付している。又、墨の○印の上又は右（まれに左）横に歌の通し番号を付しているが、この番号には付け落しや重複が見られるので、本翻刻ではそれとは別に私に通し番号を付した。総歌数は一一三である。

奥書きによると本書は明治元年、小笠原勝兵衛の手によって成ったものである。小笠原勝兵衛の名は、中野・藤下本『歌雙紙』の奥書きにも見えるもので、同書には以下のようにある。明治拾四年／正一月日／愚筆以書之 小笠原勝兵衛。両書の内容もよく似ているので、同人が別の時期に記した、いわば兄弟本と見てよからう。

本書所収歌は『歌乃雙紙』と同じく「オロシ構造」を持ち、「オヤコウタ」に「オロシ」を添えるものを中心として、まれに「ユリウタ」に「オロシ」を添えるもの（本翻刻の歌番号、六、一一、一九、二一、二二、二六、四八、五三、六三、八九、九一の十一首）が混在している。他に「ヒトツウタ」が二首ある（一、六二）。各歌の「オロシ」の数は一行のものが五十、二行のものが五十四で相半ばしている。他には「オロシ」のないものが二、三行のものが五あり、四

行以上のものはない。『歌乃雙紙』の場合、一、二行のものほむしろ
 少く、三行以上のものが多かったのとくらべると、この点は本書所
 収歌の特徴と言ふことができる。一般に新しい田植本ほど「オロシ」
 の数が少くなる傾向があることが知られている。地元伝承される
 歌唱法から見ても「オロシ」の少い方が実用的のようで、所蔵者の
 小笠原威若氏によると、『歌乃雙紙』よりも本書の方が実際に合つて
 いるとのことである。田植本のいたみも本書の方がはげしく、近年
 まで実用に供されて来た本であることがうかがえる。本書所収歌の
 中には「田植草紙」と「オヤコウタ」の歌詞がほぼ共通するものが
 五十三首ある。^{注1)}

本書の組織は、六〇の歌のあとに「ひるまでのふたをはる」とあ
 り、次行に——線を引いてさらに「ひるからのふたはじめ」と記し、
 そのあとに六一の歌を記しているところを見ると、大きく一〜六〇
 の「昼迄の歌」と、六一〜一一三の「昼からの歌」とを分ける二分
 法がとられているものと考えられる。それぞれの部の冒頭、一と六
 一とが「ヒトツウタ」(「ヒトツウタ」は仕事始めの歌い出しに歌わ
 れる)であることもこれと符合する。「昼迄の歌」の中は、二五(酒
 の歌)のあとに「日之五々までのふた也」とあり、ここでさらに二分
 されていることがわかる。次いで「これより三ばへまつりする事人々
 西に立ならひ東にむこうてさかすきする事」と記されている。二一
 二四、及び二六〜二八は「三拝歌」である。「昼からの歌」の中
 は、八八(これも酒の歌)のあとに「こゝにて三ばいまりする事」
 とあり、ここで二分されている。八九が「三拝歌」である。

以上の組織法は中野・藤下本の場合と同じであり、歌の配列にも

両書は大差がない。ただし藤下本は、冒頭に「三拝由来書」を付け
 ており、総歌数も一五五と、本書より四十二首多い。藤下本にあつ
 て本書にない歌を藤下本の歌番号で示すと以下の通りである。三、
 四、一四、一八、一九、二七、二八、三七、三八、三九、四八、四
 九、五四、六五、六七、六八、六九、七〇、七九、八〇、九二、九
 六、九七、一〇五、一〇六、一〇七、一〇八、一〇九、一一〇、一
 一一、一一五、一二九、一二〇、一二一、一二二、一三二、一三三、
 一三五、一三八、一三九、一四〇、一四一、一四七、一五〇、一五
 一、一五二、一五三、一五五、以上四十八首。一方、本書にあつて
 藤下本にない歌を本翻刻の歌番号で示すと以下の通りである。一四、
 三一、四〇、五〇、七八、八七、以上六首。

同じ新宅屋本の『歌乃雙紙』は、冒頭に「三拝由来書」を置き、
 以下、歌を「五つまでに歌ふ歌」「四つじぶんの歌」「昼のうた(四
 つ半迄)」「ひる迄のうた(九つ迄)」「ひの八つ迄」「ひの七つ迄」の
 ように細分して収めている。総歌数は一七八(内二首は重複記載)
 と本書より六十五首(ことなり数は六十三首)多い。『歌乃雙紙』に
 あつて本書にない歌を『歌乃雙紙』の歌番号で示すと以下の通りで
 ある。二、六、七、一五、一六、二四、二九、三〇、三一、三七、
 三八、三九、四二、四五、四七、五一、五二、五三、五五、五六、
 五七、五八、五九、六〇、六二、六三、六四、六六、六七、六九、
 七〇、七二、七四、八〇、八三、八八、九一、九二、九六、九七、
 一〇〇、一〇一、一〇八、一一〇、一一一、一一三、一一四、一一
 五、一一六、一一七、一二三、一二四、一二五、一二六、一二八、
 一三四、一三六、一三七、一三八、一三九、一四〇、一四二、一四

三、一四四、一四九、一五二、一五三、一五四、一五五、一五六、一五七、一五八、一五九、一六〇、一六一、一六二、一六三、一六四、一六六、一六七、一六八、一六九、一七二、一七三、一七五、一七六、一七七、一七八、以上八十九首。一方、本書にあって『歌乃雙紙』にない歌を本翻刻の歌番号で示すと以下の通りである。四、六、七、一〇、一一、二〇、二二、二四、二八、三六、三七、四〇、四七、四八、五三、五四、五五、六二、六七、三四、八六、九三、九七、九九、一〇八、一〇九、以上二十六首。

以上のことを総合して、本書は、この系統の田植本の中、(1)冒頭の「三拜由来書」を欠くこと、(2)歌の区分(組織)が大まかであること、(3)「オロシ」の数が少ないこと、(4)総歌数も比較的少ないこと、などの特徴を持ち、明治期の当地の田植の実用に近いものを反映した田植本であると言ふことができよう。

翻刻にあたっては字体を通行のものに改めた他は改変を加えていない。破損箇所は□で示した。各歌に通し番号を付けた。

注(1)中野・新宅屋本『歌乃雙紙』は、奥書きによれば文化十四年筆録のものである。所収歌数一七八。冒頭に「三拜由来書」を置き、所収歌を、歌う時刻ごとにまとめて配列する組織法をとる田植本の系統中、古態を伝える善本と目される。なお、この系統の田植本としては他に「上大江字本」「清水屋本」「有久本」「藤下本」などが知られており、島根県邑智郡石見町一帶に伝承されるものである。

注(2)友久武文氏「安芸石見の田植本と田植草紙」、『田植草紙の研究』 田唄研究会編 三弥井書店 一九七二年刊所収)に示された分類による。

注(3)以下、「オヤコウタ」、「オヤウタ」、「オロシ」、「ユリウタ」、「ヒトツウタ」等の術語は田唄研究会「田植歌研究用語解説」(同前書所収)による。

注(4)本書と最も近い関係にあると考えられる中野・藤下本「歌雙紙」(注(5)参照)では、この歌には「あらい川ではしげふてものをゆはれた」という「オロシ」一行が付いている。

注(5)真鍋昌弘氏翻刻。『日本庶民文化史料集成』第五巻 三一書房 一九七三年刊所収)

注(6)藤下本には冒頭に、本書にはない「三拜由来書」があり、歌数も多く、やや改まった筆録態度がうかがえる。藤下本の原本は筆者未見のため、筆跡等については言及することができない。

注(7)「オヤコウタ」が「田植草紙」のそれとほぼ共通するものを本翻刻の歌番号で示すと以下の通りである。()内は該当する「田植草紙」の歌番号、——線を付したものは「オロシ」までほぼ似ていると認めうるものである。二(二四)、八(五)、九(二)、一一(二二)、一四(二〇七)、一七(二三)、一八(二)、二五(四四)、二九(八)、三〇(四三)、三二(四)、三三(二〇)、三八(二八)、四一(二六)、四二(一五)、四三(一七)、四五(二二)、四九(二四)、五二(二七)、五六(二六)、五八(九〇)、六〇(二八)、六五(九三)、六八(六二)、七〇(四二)、七二(六四)、七五(五六)、七八(七七)、七九(六一)、八〇(三八)、八一(四〇)、八二(四二)、八三(三三)、八五(五五)、八八(三三)、八九(四六)、九一(三二)、九二(三三)、九四(三三)、九五(三六)、九六(三五)、九八(三四)、一〇〇(九四)、一〇一(二二)、一〇二(九五)、一〇三七(二)、一〇四(七五)、一〇五(二八)、一〇六(八四)、一〇七(九七)、一〇八(二五)、一一一(二七)、一一二(二七)、一一三(三四)、以上五十三首。

翻刻

人王六拾六代一條院

長徳元年梅天甫

田植歌乃双紙

心 三国ノ五月夫女
出雲佐田之心
多田之満中□

表紙(一)

(白紙)

表紙(二)

一 考 なへのはつをはうへてそたてていなつるひめに参らせよう

なへのはつをはまつ三ばへに参らせよ

うたのそふしはから天ちくへとられた

ひとつそふしは京しらかはてながいた

うたはしらねとそふしの大工のじやるまで

二 〇けさとうのこのへはよいとりのこへやれ

△田耄たんに五石たよいとりのこへやれ

なにとよいとり米八石とうとうた

とりがうとうてよぶかへとのをもといた

三 〇をもうこのことねたるそのよはな

△をもふことをかたるとてさらにねもせずの

とのこしようてあいふくかせのさふいに

とのこうらめしよあけのかねかななるもの

四 〇けさとのこみをくりにかみさしをををといた

△とのごをもいにかみさしをををといた

なにとかみさしばんやの人かひろうた

五 〇ゆうべのしのびどをたれをたれとをえた

△京の六らへならの七らへ新蔵兵衛右とをほへた

なにとをほへた新蔵兵衛とをほへた

六 〇をもしろきやあれこかねのこゑんにこしをかけて

△こしをかけてやあれかみとくまをはしばしまて

しばしをまちやれかみとくまをは

をきてかみをとけとの田にたいこかなもの

七 〇むかいなる山寺にけさのかねのをやれ

△なゝつなるげなけさのかねのをとやれ

なゝつなるげなけさうつかねか

けさのよあけのなゝつかねは

八 〇けさとうのこがらすはつゆにしよぼめれての

△うらゝとないてたつつゆにしよぼめれての

つゆにしよぼるれきゝようのそらをたゝれた

からすとまりよしへの森かたをんた

森のこからす七ないそつまのなくこへ

九 〇けさよあけほのぼろに山のはをみたれば

△きりやるかすみやる山のはをみたれば

まだもはれのかみせんをきりか

一〇 〇京うへる田のしのあさてをみたれば

△にしきのはかまはいてをうきてにもちてな

二才

二ウ

三才

三ウ

四才

をうきてにもちをいせのかみに参なぞ

二〇田ぬしのやあれあさてをみればはかまはいて

△はかまはいてやあれわざしさいていせい参る

いせい参て三しやのかみにをれいしよう

三〇けさとのゝあさかりつるまきををといた

△つるまきにさたもない五丈かみををといた

つるのまきよりしげどうまきのゆみやを

三〇けさとうのと原らはといをりやるのを

△はご山にをじやるやるをとりかこをにのうて

かこのもどりにをてようす水の

てようす水にはやなきの本の清水を

二四〇京げすのきわをみうよもといきはをみつれ

△こうばいちらいたりかてむすんたりな

けすのこなればもといもかんひの

二五〇けさ田いをりるときもといをといたよな

△その紙をさいてたまへもとい紙にせようやれ

をしやたまとの五丈の紙ををといた

二六〇わろうらかとのこわうまをひきつれてな

△くきかりにこさるやうまをひきつれてな

われがとのこわ三ばのくさにまようた

なにとくさかりのうてわ山をかせいた

二七〇けさきりのまきれにきじかなひたとの原

△きしやる高やるないてとうり候の

きじかなくくあのは山をたゝれた

四ウ

一八〇せとのくるまとをけさあけてみれば

△小鉄にまさりたあさひさいたよな

けさのあさひわさもふらやかなあさひ

二〇〇あさひさすやれやほそどにあけてみわたせば

△みわたせばやあれ小鉄にまさるあさひさす

あさひさいてはひんかし山の

くもりかゝろかあさひのたない

二〇〇あさひてようぢやのをとむこのさゝきまいたるてふりは

△せん石なれよとゆふてまひたるてふりは

二三〇三ばいのやあれやふゝゆの水はどし水

とこし水やれ大和の国のいわし水

なにとうぶゆは大和の国のし水

二二〇三ばひのやあれふゞきぬたちはなにだちか

△なにたちかやあれしろむくこそてをやゑたちに

やゑにたゝてはやへなるへたをとられた

二三〇三ばへのござるやるつゆをこきわけてな

△かちんはゞきこうかけでつゆをこきはてな

つゆをこきわけいま三ばいのござりた

二四〇三はいのござるやるさぞの山をこいてな

△にしきのはかまはいてあやのこかさてな

つゆをはらふにたんひらかさがよいもの

二五〇酒はくるさかなわなくしてしんぢやの

六ウ

八ウ

△しんちやのばあをすあへにあへて御さかな
さかななくしてくわざんちゝちやをすあへに

日之五ゝまでのふた也 これより

三ばへまつりする事人々西二立ちならひ

ひかしにむこうてさかすきする事

九オ

三六〇三ばいのやあれやとちからこざる宮みやの方から

△宮のほうからやあれあしげこまにたつなよりかけ

たすなよりかけいま三ばいのござりた

三七〇三ばいゝとまつる神なればの

△その神をのせてたもれのふやを三ばいやれ

まつる神なら三ばいのせていさませよう

九ウ

なにと三ばいみこしにのせていさませう

三六〇三ばいのめすうまはよいうまでごろうじ

△よいうまによいくらにたすなきり上あてな

たすなきり上あやわたのばゝをのり行ゆく

まつかすけりてやわたのばゝかくらんだ

三六〇あさねをせようよりもをきてをきをみやれ

△さつきのさひようへかさよにこいたをみやれ

さつきさひうへかさふねこいたと

あさふねにのりやをくれてふなつにたちをわすれた

三六〇むかいなる大寺をけさをきてみれば

△うつくしきちこたちが花はなをりかざいた

十オ

花をかさすはみな寺てらの

ちごのもちたる花ひとふさがしよもんな

三〇日ひはそらにたこうなこのたにこうぞな

△せん人のせいをそろへこの田にこそな

せいをそろへてうひようやこれのかとたを

これのをとよめせん人中の田すかた

三〇をく山の小うさきはなにをくうてこれまで

△はぎやいそのめやつゆをくうてこれまで

はぎのわかばへうさきかねぶりからいた

なにとうさき三しら山をかせいた

三〇うちのちやゝまのちやゑんをごろうじ

△しんばがひらいてよいつみころな

しばひらいていまつみころな

三〇ちやつみじよろしゆのきいせよをごろうじ

△ちりめんたすきにべにそめのかたひら

ちやつみじろしゆはみなべにそめのかたひら

三〇さきふじのつのまきかれうびんかゝとまりた

△よいつのまきのかれうびんかゝとまりた

かれうびんかゝよいつのまきにとまりた

三〇京田はかざりたてべようどうなはをみせようせ

△よいなわ立たのびうどうなわをみせうせ

さてもみ事なびよどげさのなは立

三〇わろうらがとのこは京てなにをなろうた

△一に大いこ二にふへ三でさゝらてびようし

十二オ

十一ウ

十一オ

十ウ

さゝらするには三んさらさらとするもの

十二ウ

ならぬ大こもうつてかうてばようなる

三〇^{三七}つゝみうち九とう左衛門かねのやくわかし原

△しろうらもたるうらもけいこせいてはかなるま

つゝみうちよりたゝかねつきのやくめが

三〇^{三八}つゝみうちのけいこをたれにうちやなろうた

△大坂の長助がつゝみうちがじようすで

うちやなろうてよいしなやいを

三〇^{三九}かと田かざりにはたを立たよな

△きよううへる田のぬしのときのしらはたな

たてたしらはたをいへのかざり

三〇^{四〇}さばいかみなこゆへなこをゆふはせはの

△みやこめれたやなこをゆはねばの

なこをゆはねばねみたれかみの

をなごくろかみけにするすみて

三〇^{四一}京くしをこうてたもれきようくしこそな

△かみもしなやれ京くしこそな

こうてしんじようぜこんとのみよしで

くしをこうたよかみかへかざれ

三〇^{四二}みやづかいをせうならばあかりせうじのかけで

△かみかざりけはいせうやあかりせうじのかけて

けはいめさればなゝへのびうぶのかけんで

けはいせうにはけはいのどうぐをわすれた

三〇^{四三}京うのさとはけはいさとからすかねつけてな

十四ウ

△つばくらはべにさいてこうはこそできるとな

けはいさとではからすがかれをつけたよ

こそできたよりはかいがのゝこきたのが

三〇^{四四}あさをのたねとてけさもまいたよな

△やよめのあさをばたれにといかるうにや

やよめあをがふたはにならはかりほせ

あさのきをろしやらいそかしや

三〇^{四五}むかいなるはたやにはたたてたよな

△まねきたてたよあたをたてたよな

はたをしたててへいぜいのゝををなもの

三〇^{四六}いたじぎにたたをたてをもしろいものやれ

△きりりきとなるをもしろいものやれ

ひめかをるかやよいはたをとの

三〇^{四七}十七かやあれややつほそのゝををるときは

△をゝるときにやあれいとよりこまいほそしを

をりやをろいてならのさるして

三〇^{四八}あいの花はさいたかなあにそめるとてな

△かれうばかまそめるとていてあろうたよな

かれうばかまをといたれ花かさいた

三〇^{四九}京うのまちのじうろたちははかたちかじようて

△やよにたちやよにぬいやよにへだをとるとな

やゑにたてゝはやへなるへたをとられた

はかましたてゝをうつのかりばへ

十六ウ

五〇^{四十九}むかいなるあをや山にしかのないたこへやれ

△みこへはんなくつまをよぶこへやれ

みこへはんなくよこへとないたはしかのを

三〇^{五十}かいたのをきにそしかゝふしてこそな

△ゆみそろへやそろへしかゝふしてそろろな

しかゝふしたよをうていまはせ

十七オ

なにといてとれをうないしかゝふしたよ

三〇^{五十一}きみ様のやあれふじまきかりのをもち

△をもいたちやあれしよこくのたいめうかあつりて

しよこくたいめうはいまこそふじのまきり

三〇^{五十二}大つのかりようとのてたちをみにゆこ

△ぎようれつがあるげなてたちをみにゆこ

なにとてたちはたひしようぞくのでたちた

ようもそろろうたをうつせいは五万ぎ

三〇^{五十三}ふじの山のかりうとのかといてをみやれ

△かちんはばきまいかけてかといてをみやれ

なにとかといてかちんのはばきまいかけ

むくきまいかけかりばのてたちまいかけ

三〇^{五十四}をしろいものはふじのまきかりな

△ゆみやをそろへてふしのまきかりな

ふしのまきかりみなさむらへのまきかり

ふじは大山本からつしに九りある

ふじは大山ふも本を七日まはりた

十八オ

三〇^{五十五}ひるまをまつはたゝをきはやふねにの

十八ウ

△ほばしらをしたてゝかせをまつがこくよ

ひるまふねやるをうきにてたは

ひるまふねにはしぞふふねをつくりた

三〇^{五十六}ひるまふねのほのうへにとまるとりはなにとり

△くちハにしきにせうれんげはねのしいとやれ

はねのしろいわみやこのとりかや

三〇^{五十七}ひるまもちのこざるやるあかいかたびらでな

十九オ

△ひらりしらりとあかいかたひらての

あかいかたひら五貫にこうたがたかいが

くしこうばいかたにはべにのかたびら

三〇^{五十八}ひるまはきだんだがなにをきるにな

△わかさのはまのわかめをきるにの

わかめかいよせほそいかさいめの

十九ウ

ひるまでのふたをはる

ひるからのふたはじめ

三〇^{五十九}一をうひとつどによねせん石とかせいた

かせぎをいてはこのたに米がせん石

三〇^{六十}ひるまのところではしの代をわすれた

△ごせん本いとうてたもれはしの代をわすれた

はしの代をはこそせんたなへをいたよ

二十オ

三〇天じくのやあれ高まか原にひるねして

△ひるねしてやあれをもうとのこをゆめにみた

ゆめにみたものまへかみ様を

をもふとのこをゆめにはいやた

畜〇をきのふねのせんだうのひるのねごとわな

△てむく八つにはしか七つかねか十六丁やれ

かねか十六たいこか七つあるもの

空〇をもうやなきはかとたにこそな

△ゑたもさかへてかたとたにこそな

なにとかと田にやなぎがしだれ

六十三 〇しだれこやなぎこのんたようじをおといた

△けすりみやすてようじきにはよいとな

ようじけづらばなるてんじくのひわのき

六十四 〇とのゝまへのやなぎにまりかゝれかしな

△とうりさまにけていのうまりもか

六十五 われかとのこはまりけのしうすて

△〇のぼるやる下るやるあいがみつゝれてな

六十六 〇わしは京へのぼるがどうしよはないかや

△わしかもとの才太郎をつれてのほらされや

〇をにこそなあいとる川のかしらを

あいのしらほしめもとのこじはが

〇わしは京へのぼるがどうしよはないかや

△わしかもとの才太郎をつれてのほらされや

つれてのぼりて京きよみずい参う

をくのいんまで参ればふくをさづかる

七〇京へのぼるみちにこそまつむろのじくんで

△ほてをゆふたりはないたりとのまといたりな

とのゝまとやに京しらすきの

をしのをいもはがひとすけほしや

七〇京のぼるみちにこそむろのはやしにの

△なくひよとりのなをこいになくやら

なくはひよとりこいけにすむはをしどり

なにとをしとりたつともあとをにこそな

七〇京ういのぼるみちにこふしくろのいねやれ

△いね三ばにの米が八石の

七〇京へのぼるにいそをさよりと

△さよりゆけば大坂へつくとな

のぼりついてはろうかにこしをかけふや

こしをかけてわ三このまがわかや

七〇大坂の天のうしのむねのかやかたらいて

△それをてんてにからいてはなにをてんてにからか

かやがたらいて三ばのかやをかるげな

七〇をく山にかるかやわきのうかり京かりか

△きのふかりわはへてた京かりな

きのうかりよりた京かのかやをは

七〇京のやわたの松のこへだにの

〇をく山にかるかやわきのうかり京かりか

二十ウ

二十一オ

二十二オ

二十二ウ

二十三オ

二十四オ

△つるかすをかけ松のこへたにな

松のこへたにけにすみよいかや

つるのすこもりやわたの松に

七十四 ○京の町のよりつきのひたりこうじ

△せようきさいたりごうたりばんの□さみて□

われがとのごはばんすご六のなくさみ

七十五 ○せようきはさいたれどばんのめをしらいて

△十二の才はもれどばんめをしらて

しらすをすよせばんとりよせて

七十六 京の町をとうればらいこうじな

なつならべてらいこうじにの

町かたてかし七つゑれこの町が

七十七 ○をうぎのほねやごせ七つけづりてな

△八つけづりてなかなめとんとうとうや

とんとふたれたをうぎのかなめ

かさしたまへやをうきはなつもの□

七十八 ○をふきのかさしより竹のかさしこそな

△すんすしけれとも竹のかさしこそな

竹のあいからすんすしかせかふくもの

かせかふくならすんすしかろうの

七十九 ○をうきわ本なりきみは二人なりの

△さこうや／＼なかをとんとさこうや

さくにさかれのをうぎのきみは

ひとつをうぎさこうわきみのをしゑぞ

「 二一六ウ

「 二一五オ

「 二一五ウ

八十 ○そらいろのじをうきに月のわをかいたと

△それをかいたとのごはこゝろにくいとのやれ

そふにそれぬをふきの白へ姿ほ

八十一 ○をうきをさしやけてまいをまいよれば□

△ゑんのそらでふへをふくまいのがくにあはして

かくをあわひてこみこかまいをまうもの

八十二 ○きのふ京から下りたる白すけのかさをば

をうきさしあげをもいしかたへ参らせ

△わろうらにかたいては白すけのかさをは

八十三 ○かさばかそろうたがなにかさがそろうた

△つくしがさに京かさにはりまかさかそろうた

はりまこがさがをもうかゝたい

八十四 ○ひるのつじのかさをはろくにきいやそふとめ

△のふはいかげをさすろくにきやそふとめ

ろくにきやれやのふばいかげをさすも

八十五 ○ひるまのうへにこそむろやすみさけの

△よいすみさけのこれも田うあけの

これも田ふやけよいすみ酒のをりんた

こゝにて三ばいまりする事

こゝにて三ばいまりする事

八十六 ○三ばいわやれこし参らするよいさけを

△よい酒をやあれながへのてうしてちよの酒すき

「 二一八オ

「 二一七オ

「 二一七ウ

こしを参らはなかへのでようして参せよう
またも参らばすな田に水をのむことく
六〇^{八七}十二のをてようしたまのこしれてな

△田ぬし様に参らせうや京のをいらい

田のし様にはかんねのでようで参らせよう

なにとをしやくがまひとつ参れとゆふも□

しやくをとらして参れやかゝの□く酒を

六一^{八八}〇おなりをやあれやどこまでをくるべしせきう山い

△せきう山のせきてらのむらすみ林かせきと山とうけ

をくりたけれとせき山三りかをそろし

なにとをそろし三りか内は松山

なにとほそいことうげのちやかちかいか

六二^{八九}〇きようふへる田ぬしは田のさこうへてな

△たつなみにくらをたてとくをまねいたよな

つくりなびけて四ほうにくらをたてたよ

くらをたてゝは菅村てうぢやとよばれた

六三^{九〇}〇田ぬしのせとぐらになるはなにのをとやれ

△ちやうりくゝりとなるはせにのをとやれ

田ぬしみくらになるのがせにのを□やれ

せにをもちやれせにこそそてをひくもの

六四^{九一}〇田ぬしのせと田にさくはなにばなの

△いの花酒の花さけばとくの花やれ

六五^{九二}〇この田にさくはたゝしばくさの花やれ

なにと田ぬしのせど田にさいたはとくの花

△この田にさくはたゝしばくさの花やれ

△てにをり入てのこせよへ参ろやれ

こせい参るにあをいの花ををりもち

花ををりもち参ろやこせようへ

六六^{九三}〇京にこそならにこそせうちにこそな

△はすの花がひらいたこせうしにこそな

花かひらいてこゆけをからむ

ゆけをかゞんでこゆけのふ□

六七^{九四}〇よしのゝ山にこそ花かつほんたよな

△梅めやさくらや花がつほんたよな

梅やさくらやほたんの花やつほんた

六八^{九五}〇くりの花やる白さいたはの

△なろうならじ花にといたまへ

くりの花ても白いかをすないものんた

花にみがるたをんだゑたに

六九^{九六}〇くり原をとればくりがをちるけにやれ

△やぶれたるそでんでたまらざるけにやれ

そてがやぶれてくれ田にはらりとこほれた

なにとをなごがうちあけたまをへぬ□

七〇^{九七}〇梅のにをいたづねてすへをまはれふくゆす

△ようにまはれうぐゆす花ちらかすなやうくゆす

にをゆたつねてこすへをまはれうくゆす

なにとうぐゆす花ちらかすなやうくゆす

七一^{九八}〇梅の木のひたんでこれまりをとんとけたれば

△梅わはらりこぼれるまりはそらにとまりた

とんとけやげたまりをばせうすなどのんた

九十九
〇さつきのそふとめわ梅をまいるまいかや

△梅わすいしはかいしゆてもゝはにかいものんた

梅をまいれや梅にわこへがやはらく

こうてまいれや天じんをしむから梅

百
〇京くだりのぜうろたちのをいわなにゝつ□

△にしきのゆたんかけからくさにつ□んた

なにとつゝんた京からくさにつゝんだ

百
〇京下りのせようろたちのきんのつまになにやろ

△すみすゞりふでやろうからくねなへのをびやろ

をびをやろうせからくねなへのをびを

百
〇うまのりが三人とうるかどれが万十郎やれ

△そめたづなぶちま中のが万十郎やれ

うまのはやいわこうばいたづなぶちんま

百
〇をてどの小ていとこのこまはどこへつないだ

△ふねをこし谷をこしさがり松につないだ

つなぐこまをはの木はの松につないだ

百
〇まがいさんでのぎわの松をかやいた

△をびはにもこびはにもびわなかりけり

ひわよいゝゝ小ひわよいゝゝ

△ひわとこにをいてきた

ゆふへのところていしらびうしのをていに

ひわをわすれたていしらびようしのをていに

ひわのかしらはをていのすまにわすれた

百五
〇こし山のとうげにふたをかいてたていで

△をもうとのここいしやとふたをかいてたていで

ふたのをもてにこいしとはかりかくのか

百六
〇百いろのたまづさをぎんのはこい入てのう

△をもうとのに参らせやぎんのはい入ての

あけてみればこいとのおみ

百七
〇しのおなわてになるこかけたよな

△をもうとのごがひいてとうれかしな

ひけどならぬかゑんないとのゝひくのは

百八
〇ふつくしきさくら花をうりもちてこやれ

△ねやのかざりにをうりもちてこいやれ

さくら花よりどんすのよきかよいもの

百九
〇むかいなるさゝわらはろうかしゆでんつくりか

△ろうてもないしゆてもないさてもねよいさゝ原

しのぶさゝわらたゝみにまざるさゝ原

百十
〇ようさのあらいしげふなれかしな

△をうてなりともゆをやしけふなれかし

さゝの中にもけにくるとのがいとうしい

明治元年

戊辰五月吉日

愚筆以書之

小笠原勝兵衛

島根縣石見國

邑智郡中野村

横見原四百七拾五番地

新宅屋用

小笠原貫一用

表紙(三)

表紙(四)

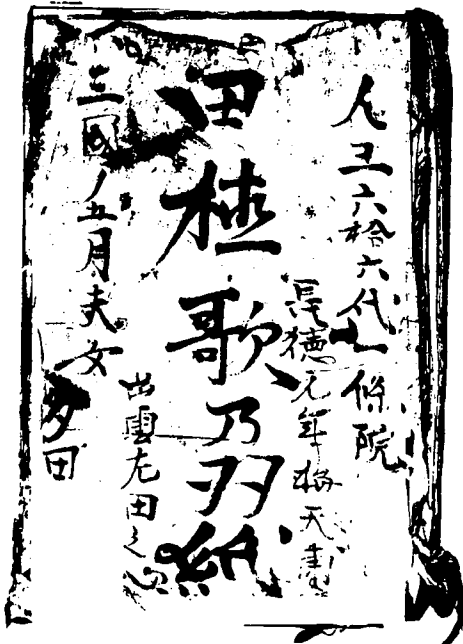


写真2 中野・新宅屋本『田植歌乃双紙』表紙

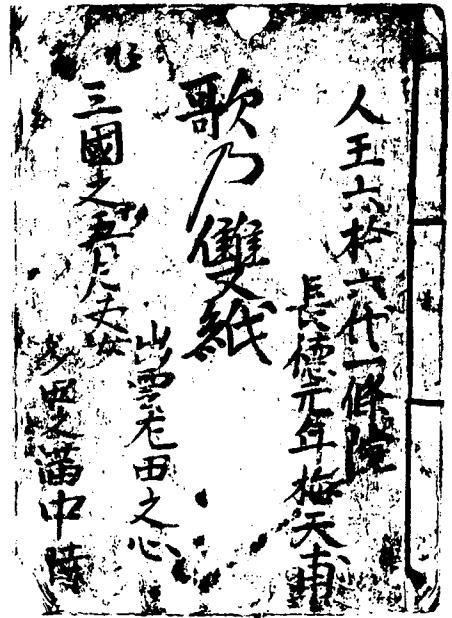


写真1 中野・新宅屋本『歌乃雙紙』表紙

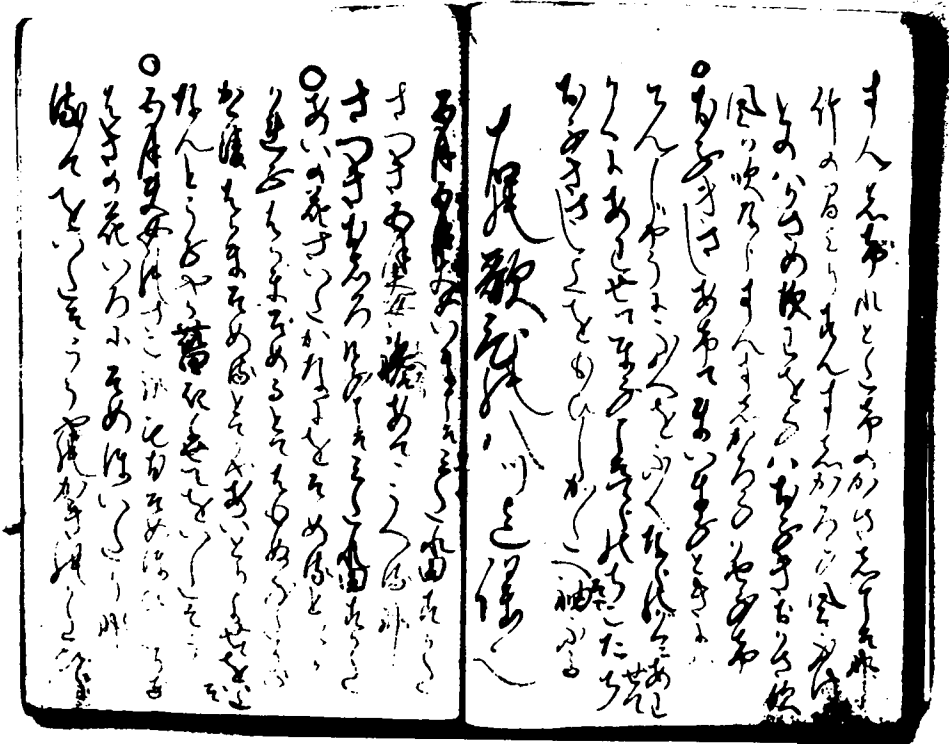


写真3 中野・新宅屋本『歌乃雙紙』第35丁裏～第36丁表

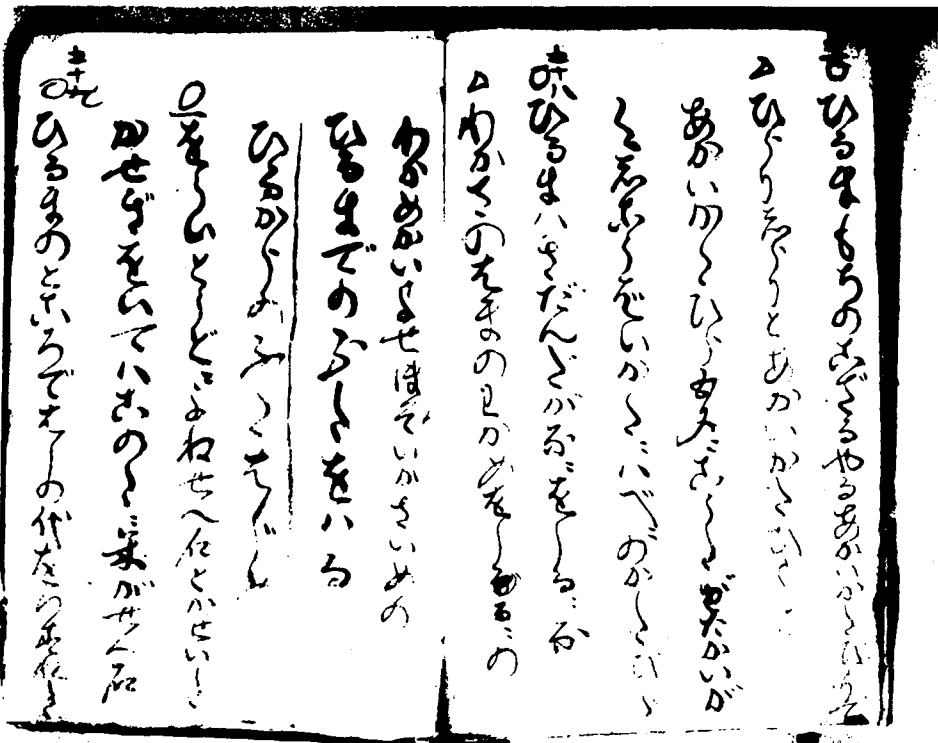


写真4 中野・新宅屋本『田植歌乃双紙』第19丁裏～第20丁表

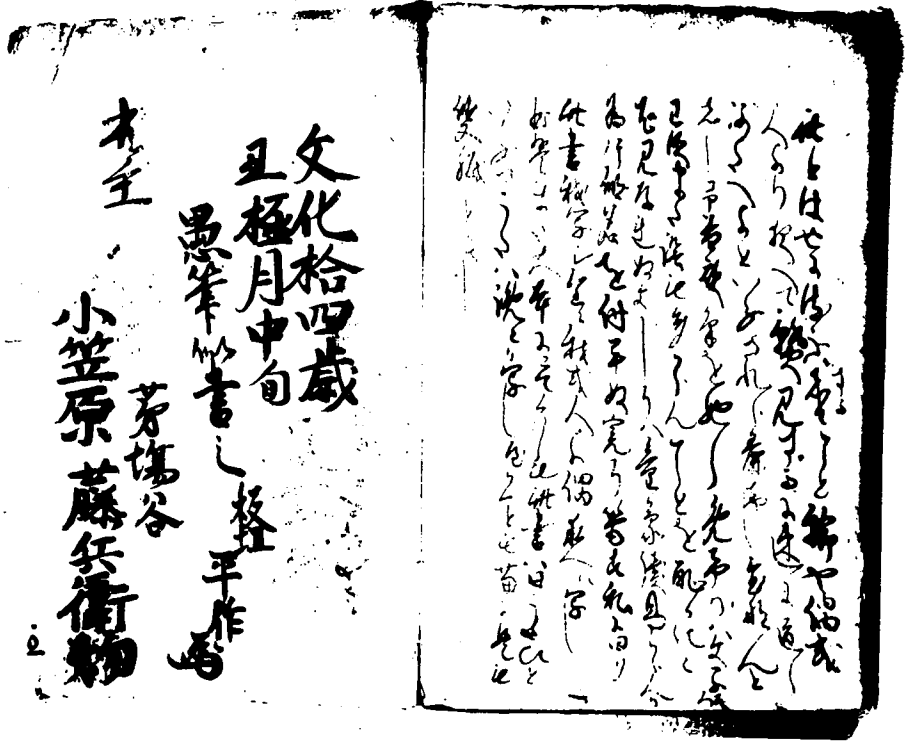


写真5 中野・新宅屋本『歌乃雙紙』奥付

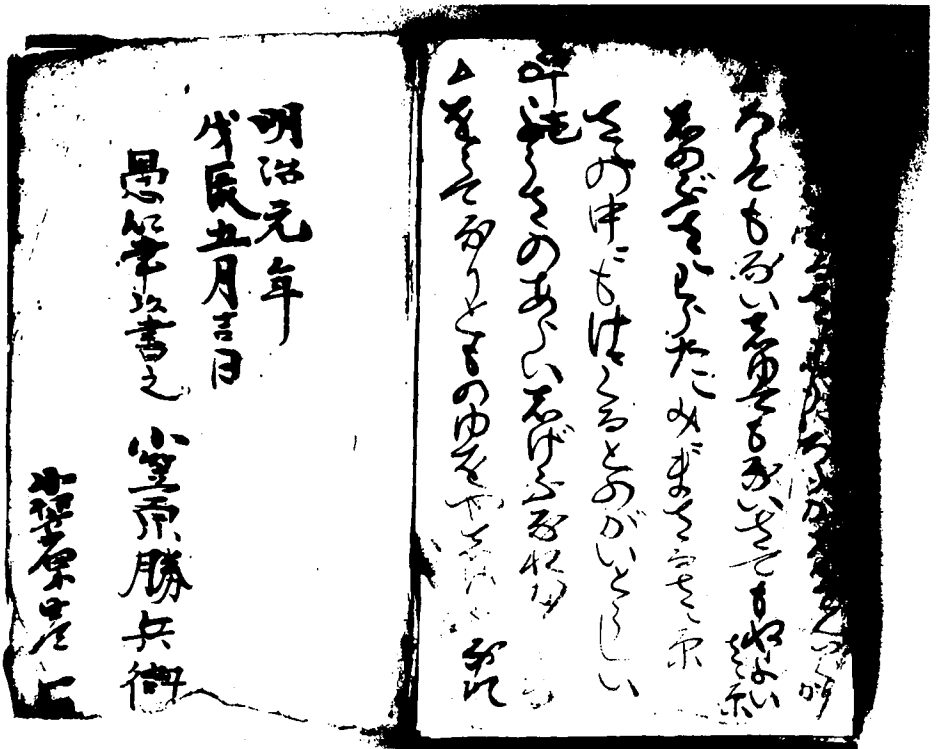


写真6 中野・新宅屋本『田植歌乃双紙』奥付